

コロナ禍に思う交流センター活動の在り方

宇賀荘交流センター館長 深田三夫

ひと月ほど前だったでしょうか、一つの小さな新聞記事が目につきました。「この冬、山陰両県のインフルエンザ患者が激減、数名か」。早速、厚労省のホームページを開き確認すると、確かに全国的に患者数が激減していました。また、新型コロナウイルスが日本に上陸する一昨年(2020年)の12月のことですが、やはり新聞記事で、「この冬はインフルエンザが10年に一度の大流行か」の記事に慌てて、行きつけの病院でワクチン接種を受けました。年が明けて1月の初め頃までは予想通り患者数が急カーブで増加しました。ところが1月の半ば頃から激減、この時がちょうど新型コロナウイルスが国内で感染者数が増えていき、連日ニュースとなった時期と一致します。15年ほど前だったか、鳥インフルエンザウイルスの変異種によるパンデミックが大きな話題となった時に、大学医学部の感染症が専門の先生の講演を聴いたことがあります。「感染症を防ぐのは簡単なことですよ。マスクをすることと、自分の手で口や鼻を触らないことですよ」と言われたことを今でも覚えています。さらに「ところが、私たちは無意識のうちに一日のうちに何百回も自分の顔に触りますからね」と。さて、前置きが長くなりましたが、今年度は新型コロナウイルスに振り回された一年でした。市からの指導もあり、スポーツ大会、盆踊り大会など、恒例となっていた大きな行事をことごとく中止せざるを得なくなりました。楽しみにしておられた地域の皆様も落胆されたかと思います。現時点で感染が治まる気配もなく先行きが見通せません。そこで今年度の下半期から、交流センター運営方針を見直すことにしました。多人数集まる行事が出来ないのなら、少人数で数多くやればいけないかと。これまでも、花、踊り、健康、茶話会を初めとしたいくつかの少人数のサークル活動がコロナ禍に負けることなく活発に活動を続けておられます。地域の皆さんがどのような活動に関わりたいかは、実に多種多様でもっともっとあるはずです。私たち3人の職員のなすべきこととして、どのような催しをしたらいいのか、アイデアを出すことはもちろんですが、アンテナを広げ地域の皆さんのニーズを把握すること、そして、重要なのは中心となって動いてくださる人材を捜すことです。日々の雑談のなかでいろいろなアイデアが出てきましたが、なかなかそれを形にしていくというのは至難の業です。ひとが楽しみや喜びを感じるのはどんなときなのかを考えてみました。形のないものから形あるものに仕上げていくプロセスというのはそのうちのひとつかと思います。手芸、工芸、絵画、料理、野菜や花の栽培、数えればきりがありません。昨年の秋以降、ほぼひと月に1回の割合で「もの作り」の集まりを開いてきました。木工教室、注連縄作り、花の培養土づくりなど。また、“プチ文化祭”として、写真はじめ、ご家庭で作られた手芸品などを常時展示しています。また宇賀荘の昔話の語り会なども楽しんで頂いています。活動内容について詳しくは新年度の交流センター便りで紹介する予定です。ウイルスに臆することなく交流センターの活動を続けてまいります。